

# 八郎潟物語

## 「世紀の干拓地事業」



よしむら かつなり  
吉村 和就

(グローバルウォータージャパン 代表)  
(国連環境技術アドバイザー)  
水の安全確保戦略機構 技術普及委員長

日本最大の干拓地、秋田市の北東二〇㎞に位置する八郎潟干拓地を訪ねた。干拓前は東西一二㎞、南北二七㎞に広がる総面積二・二万ヘクタール、日本第二の湖沼面積を有する湖であった。著者の故郷・秋田の誇りとして小学校の頃から学んだ日本最大の八郎潟干拓事業、二十年の歳月と約八百五十二億円の費用が投じられ一万七千ヘクタールの干拓地が造成された、その歴史的な背景を再認識するとともに持続可能な農業政策について述べる。

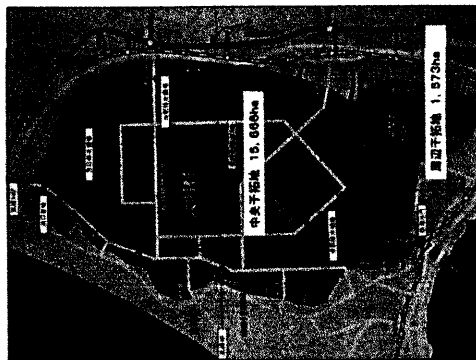
### 一、八郎潟の歴史

八郎潟は日本海に接する淡水と海水が混ざった汽水湖であった。水深が最深部でも四〜五メートルと浅く、江戸時代から幾度も干拓が計画されたが、佐竹藩の財政事情などにより実施されなかった。むしろシジミ採りや漁獲が盛んであった。明治五年（一八七二年）初代の秋田県令・島義勇も「八郎潟開発計画」を提案し、当時の農商務省で検討されたが、技術的な問題と

莫大な資金がかかるために実施は見送られてきた。

戦後の食糧事情を解消する為に国は、昭和三十三年から国営八郎潟干拓事業に着手し二十年後の昭和五十二年に干拓事業は完成した。残された湖沼は現在、八郎潟調整池、東部・承水路（しょうすいる：背後地から水を遮断し、他に排水する為の水路）、西部・承水路と呼ばれている。これらを合わせた湖沼面積は四八・三㎞<sup>2</sup>、現在では国内十八位の湖沼面積を有している。

八郎潟地区位置図



### 二、八郎潟干拓事業

戦後の食糧増産を目的として干拓事業が行われたが困難を極めた。特に難しかったのは八郎潟の湖底は周辺の河川から流れ込んだベドロが堆積した軟らかい地盤であった。いわば八郎潟は最終沈殿池でもあった。当時の吉田茂首相は八郎潟干拓事業に強い意欲をもっており、問題解決に干拓の先進国であるオランダからの技術援助を考えたのであった。

#### ・吉田茂首相の強い意欲……食糧増産

吉田茂は歴代最多で五回内閣総理大臣に指名されており、その政治的言動「バカヤロー解散など」はよく知られているが、国民を飢えさせない為に食糧問題解決にも強い意欲を持っていた。第一次吉田内閣（昭和二十一年）では、吉田茂自らGHQに赴き、連合国軍最高司令官マ

マッカーサーに直訴した。「四百五十万トンの食糧を緊急輸入しないと国民が餓死してしまう、もし日本で餓死者が出たらあなたの統治能力が疑われますよ」と直訴（恫喝）し七十万トンの食糧を確保した。この外交手腕が素晴らしい。マッカーサーは軍人で気難しくすべて数値を基にして考えるのが常であった。吉田から直訴された時に「それでは必要量を至急出してくれ」と即答し、米国から大量の小麦粉と脱脂粉乳などを送る約束をした。吉田茂は、前述の如く四百五十万トンと答へ、マッカーサーは七十万トンの食糧を米国から緊急輸入した。後日、マッカーサーは吉田茂を呼び怒った「お前は嘘つきだ、日本国民は誰も餓死していない、あの数字はなんだ、要求の六分の一で足りたのではないが、日本の統計はデタラメだ」。吉田茂は葉巻を咥えながら「当然でしょう、日本の統計が正確なら米国と戦争をしなかった！もし日本の統計が昔から正しければ日本は戦争に勝つていただろう」と返した。その答えを聞いたマッカーサーは絶句したのち、握手を求めてきた。その場にいた第三者の証言ではないので、後日談として脚色された帰来があるが、吉田茂の有名な話である。のちの人に「吉田茂のイギリス仕込みの英語力は大したものではなかった」と評されたが、喧嘩できる英会話力を持っていたのである。これが大事である。勝てる喧嘩をするためには、瞬時に相手の状況を理解し、それを突破口にしてゆく。アメリカ大統領になる夢を持っていたマッカーサーに吉田茂は「日本で餓死者が出たら、あなたの統治能力が疑われますよ、米国内のみならず、世界中の笑いものですよ」と理解と誤解をさせている。四百五十万トンの輸入量に対し、怒ったマッカーサーに「日本の統計が正しければ米国と戦争をしなかった」とウイットに富んだ返答をしている。筆者が国連に勤務していた時の経験であるが、邦人外交官は英語で流暢に演説するが、他国から「日本の考えは間違っている」と指摘された時に、喧嘩英語で反論できる外交官は一人もいなかった。政治家もしかりである。

さて話をもとに戻そう。第三次吉田内閣、第十三回通常国会（昭和二十七年）の施政方針演説では「我が国の現下の情勢は、まず食糧の確保を基礎とする」と宣言している。その意を受けて農水省は「食糧増産五か年計画」を策定、国家事業として「愛知用水事業」と「八郎潟干拓事業」を盛り込んでいる。

### ・オランダと日本

昭和二十八年、政府はオランダ政府へ技術者の派遣を依頼した。なぜ日本政府はオランダに援助を求めたのか。

オランダ（正確にはネーデルランドで低地の意味）、現在でも国土の三割は海面より低く、また国土の二割以上は十三世紀以降の干拓事業により、すべて人力で作られた土地である。オランダ人は「世界は神が造ったが、オランダはオランダ人が造った」と自負している。

干拓とは、学術的に言うと「遠浅の海や干潟の浅瀬を仕切り、その水を抜き取り、干上がらせて陸地を作ること」であり、造られた陸地は海面より低くなる場合が多く、農地化する場合は、塩分の除去と排水が必須である。良く使われる土木用語、埋め立て（水域に土砂や廃棄物を投入して土地を造成する、海面より高い）とは異なる概念である。

さて日本とオランダ干拓技術交流の始まりは、江戸幕府の初代権力者、徳川家康から始まる。今の大分県臼杵市に漂着したオランダ船リーフデ（慈愛）号に乗っていた二人の外国人、イギリス人のウィリアム・アダマス（のちの三浦按針）とオランダ人、ヨーステン・ファン（ヤン）・ローデンスタインである。家康は難破したオランダ船が積んでいた十九門の大砲、大量の鉄砲、弾薬を含む武器が一番の目的であった。武器を没収し、二人に江戸の来るように命じた。ヤン・ヨーステンは航海術、造船技術、土木技術を始め科学技術全般に詳しく幕府の相談役として、江戸城の近くに屋敷を与えられた。今の東京駅前の八重洲（ヤエス）の語源である。

オランダと日本とは江戸時代から明治維新直前まで続いた深い関係であり、鎖国中の約二百三十年間に日本に来たオランダ船は実に七百隻を超えていた。つまり江戸幕府は国際情勢や学問や技術を「蘭学」を通じ手に入れていたのであった。

・ヤンセンレポート

来日したオランダ・デルフト工科大学のヤンセン教授とフオルカー技師は八郎潟を視察し「日本の干拓に関する所見」通称「ヤンセンレポート」を日本政府に提出。ヤンセン教授の計画は、日本の技術者の干拓計画を改善・補足した内容であり、八郎潟の南部に遊水地（今の調整池）を設け、海よりも水位を高く保ち、灌漑用水として使う、日本海にショートカットした水路を掘削すること（船越水道）、その上で干拓事業を進め農地を造成すること、などであり、ここに一万七千町歩の耕地で三十六万石のコメを増産する八郎潟干拓の原型が示されたのであった。

・干拓堤防工事

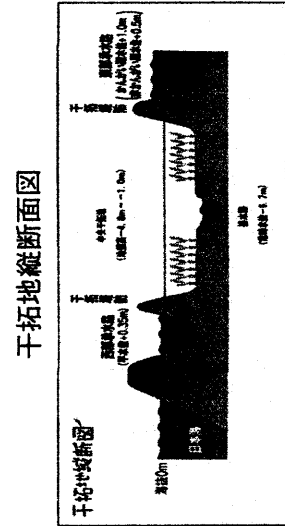
堤防工事は昭和三十三年度から三十八年度まで行われ、ヘドロの表層を掘削して良質な砂で置き換え、その上に築堤する工法がとられた。

・干拓地の排水工事

干拓地は調整池や承水路より水位が低い為に、陸地化するためには排水する必要があり、また完成してからも常に干拓地内の水を取り除くために排水機場が設けられた。

・防潮水門の建設

八郎潟は汽水湖であり、海水が混じりこのままでは農業用水として使えないので、日本海と調整池を遮断する防潮水門が設けられた。



中央干拓地は海面下-4.8mから-1.0mに位置する、干拓堤防と排水機場が命

### 三、農業政策の変遷

干拓終了後、全国から入植希望者が殺到し、米作を中心とする大規模大型農業経営が始まった。農業基本法（昭和三十六年）のスローガン、農業経営の選択的拡大のモデルケースとして八郎潟の大型農業は注目と期待を集めた。しかしその期待も長続きしなかった。食糧管理制度の廃止、自主流通米制度の始まり、国民の米食からパン食への食生活の変化で、急激に、コメが食卓から消えてゆき、ついに国は減反や休耕を現場農家に強制的に割り当てる政策を取った。八郎潟への入植農家は、強制減反に反対したが、指導に従わなければ「土地を取り上げる」とまで言われ、追い詰められた農家が自殺するという悲劇まで生んでいる。反対派は農事調停で「自分の土地にコメを自由に作る権利」を獲得したが、今度は農協から一切の買取りを拒否された。独自の販売ルートは「ヤミ米」として取締りの対象であった。だれにも頼れない農家は昭和三十二年「大潟村あきたこまち生産者協会」を設立し、契約農家から農協より高くコメを買い上げ、自社工場で加工し、独自開拓の需要家に直接販売している。（株）大潟村あきたこまち生産者協会、平成二十七年九月期は二十五億円の売り上げを達成し、さらに付加価値のある事業を拡大しようとしている。八郎潟に限らず全国には、農民が命をかけて開墾してきた農地が沢山ある、もちろん耕作放棄地も多い。

今後のTPP対策でこれらの土地はどうなるか予想ができないが、日本の農業政策、つまり食糧の安全保障の観点から根本的に考え直す時期がきているだろう。